科目区分：学校教育実践コース音楽、音楽文化コース
授業科目：「音楽デザイン」ほか

より良き授業を模索して

音楽教育講座　横山詔八

本稿では主として「コース初歩学習」および「音楽デザイン」について報告する。報告書のフォーマットに照らせば、形式・内容共にややその主旨を逸脱するところがあるかも知れないが、奉職 39 年において初めて挙行する我が儘を、この際お許し願いたい。

１．音楽デザイン

この科目は、時流に乗って（正直に言えば、受験生の確保～増加を願って）平成 19 年度に初めて専攻的意義を持つ科目として導入されたが、残念ながらこの年度は入学生が得られなかった。続く平成 20 年度にはカリキュラム改革により、一般の音楽専修学生を対象とする科目として新たにスタートした。各地の大学のカリキュラム等を俯瞰すれば、本来この名称の意味するところは、IT 技術や情報的若しくは多分に商業的意義を込められた目的性を持つものらしい（“らしい”と言うのは筆者自身、未だその実態を正確には把握していないからである）。悲しいかな、これらの目的性は筆者の専門性から遠く離れたものであり、もとよりその重責に耐えられる技量や知見を持ち合わせていない。しかしながら本来この科目は、旧来の「作曲」若しくは「作曲法」に代わるものとして設定されたものであり、“デザイン”とは広義には広く創作一般をカバーする語であるとの一般認識を拠り所に、授業としては責任の持てる作曲もしくはその理論領域で展開した。

第１回目の授業で、この授業に何を期待しているかを尋ねたところ、「理論をもっと勉強したい」「楽曲の分析力を身に付けたい」などの期待や希望が多数を占め、当初の方針の妥当性に確信を持った。

“作曲領域”といえば、日頃つとに敬遠される学習領域である。その理由を辿れば、さまざまな遠因が考えられるが、最大の理由は“移動ド”による音名呼称の混乱と、それに基づく調性感の混乱、すなわち『センセイ、ハ長調以外は分かりません』という症例を作り出していることに起因する。筆者はこれを“ハ調病”と呼ぶ。一般諸種の音楽教育は無論のこと、学校教育（音楽）現場においてさえ、その先生達が微塵のためらいもなく＜固定ド＞で使用しており、それで育った教師や親たちが、その子供達に移動ドの安直さを伝承するという、救い難い“ハ調病”の悪循環（悪性遺伝！）が果てしなく続いているのである。

さて開講初日、選択科目であるこの授業、当初はおそらく受講生は１～２人ぐらいであろうと予想したが、豈（あに）図らんや！８名もいた（８名は少ないではないかと思う向きもあるかも知れないが、音楽を専攻・専修とする１回生の学生数１２名に照らせば驚異的な？数値なのである）。この嬉しい誤算に喜々としたことは言うまでもない。

さて、先立つこの年度の前期、彼等は全 12 名が免許法必修科目である「音楽理論・作曲法」を履修した。この科目では基礎和声学を扱ってきた。カリ改革以前、この科目は後期に同名の科目②として、前期の内容を敷衍するスタイルを取ってきたが、本年度からこの②は削除された。

実質的に本年度後期が、この科目「音楽デザイン」が初めて稼働した学期であるとともに、筆者にとって最後の授業であるこの科目は、前述の通り「作曲（分野）」の名称変更であるという立場から、従前通り前期の授業を敷衍するという方針のもとに授業を展開した。ただし、内容には授業内

容としては、編曲法を中軸とする大幅な変革を試みた。平成 15 年、「誰にも分かる編曲入門」（音楽之友社）を著して以来、この分野、編曲法には特に心血を注ぎ、情熱を傾けてきたところである。

免許法に基づいて前期開講の音楽理論・作曲法の科目名称には「編曲法を含む」というのがカッコ書きで謳ってあるが、このカッコ書きについてはほんの申し訳程度にしか時間を割けないというのが実情である。この事情を踏まえて、後期「音楽デザイン」にの内容について応用和声学という位置づけを行い、その主旨を着実に実践した。その根底には、もととなる和声骨格に対して各種各様のデザイン化を図ることを主な作業とする編曲法は、文字通り音楽デザインの字義にも叶うとの考えもあった。

筆者独自の体系として編曲法を＜ピアノ伴奏編曲＞＜合唱編曲＞＜合奏編曲＞の３種に類型化している。このうち＜伴奏編曲＞を、一般学習者において和声学の知識基盤がないと言う前提で、全体の基礎と位置付けているが、本年度当該の履修者達は、すでに基礎和声学を学習しているので、本授業では体系上二番目に位置するが、実質的には編曲技法上最も重要な基礎となる合唱編曲を主な内容として展開を図った。学生達には当初多少の混乱も見受けられたが、最終的には編曲というものに確かな自信を抱かせることが出来たと自負している。

２．コース初歩学習

この授業名称に何が相応しいかを種々検討・腐心した挙げ句、恐らくはこの種の内容が総合的に採り上げられることは少ないだろうと予想されるところの、音楽に関する小辞典を学生達自らの力で作らせることを思い立った。クラシック音楽に関する辞典は小さいものでも 700 ページを越え、日常携帯にはとても向かない。それどころか、尋ねてみると音楽辞典の類は持っていないという学生が殆どであるという事実に驚く。資料や文献を自ら渉猟し理解しなければならないこの事業“小辞典作り”は、“勉強の仕方を勉強する科目”と理解しているこの科目「コース初歩学習」に、とても相応しいと強く確信した。

授業としては、予め音楽に関する重要な事項や術語 400 項目余りをリストアップし、それを第１回目の授業で配付することからスタートした。決められた順番に基づいて、毎授業２項目の事項・術語について勉強したことをレポートにまとめ、それをプレゼンテーションの形で発表させるとともに質疑を行うというのが主な内容である。レポートの中身は辞典類のまる写しや、昨今問題となっている“コピペ”が相当数あったが、その意義である“主体的な取り組みの実現”に照らせばたいした問題ではない。担当者としては、毎回レポート用紙（大体、平均３～４枚）のパソコン入力が大変であったが、ときどき何らかの事情でレポートが提出されなかったり、プレゼンテーションができなかった学生もいたものの、最終的には全ての学生が自分のノルマをこなすことが出来たことに、いま担当者としての満足感がある。

メインタイトル「重要用語・事項ノート」、サブタイトル「平成 20 年度入学学生手作りによるハンドブック」と名付けた、70 ページに届こうとする小辞典製作の試み、この経験を通して大学生としての研究や勉強の何たるかを掴んでくれたものと確信している。

今年度、学部の授業としては以上の２科目のほかに、「作曲総合演習」、「編曲法」、「初等教科音楽」の各授業科目を担当した。

筆者はこの３月末日をもって愛媛大学を退職します。衷心感謝をもって本稿を綴じることにします。みなさま、長い間本当にお世話になりました。